

平成 26 年 網走市議会
総 務 文 教 委 員 会 会 議 録
平成 2 6 年 1 0 月 3 1 日（金曜日）

○日時 平成26年10月31日 午後 1 時00分開会

○場所 委員会室

○議件

1. 平成26年度全国学力・学習状況調査の結果について
2. その他

○出席委員（5名）

委 員 長	平 賀 貴 幸
副 委 員 長	井 戸 達 也
委 員	飯 田 敏 勝
	近 藤 憲 治
	高 橋 政 行

○欠席委員（1名）

七 夕 和 繁

○委員外議員（2名）

議 長	小田部 善 治
副 議 長	山 田 庫司郎

○傍聴議員（5名）

小 澤 陽 平
金 兵 智 則
佐々木 玲 子
古 都 宣 裕
松 浦 敏 司

○説明者

副 市 長	大 澤 慶 逸
-------	---------

教 育 長	木目澤 一 三
学校教育部長	三 島 正 昭
学校教育部次長	伊 井 俊 明
管 理 課 長	鈴 木 直 人

○事務局職員

事 務 局 長	佐 藤 明
次 長	吉 田 正 史
係	菊 地 香代子
係	田 中 康 平

午後 1 時00分開会

○平賀貴幸委員長 それでは時間になりましたので、ただいまから総務文教委員会を開会いたします。

本日の委員会は議件 1 件について審査を行います。

なお、七夕委員より欠席の届け出がありましたので、お知らせをいたします。

それでは、平成26年度全国学力・学習状況調査の結果について説明を求めます。

○伊井俊明学校教育部次長 平成26年度全国学力・学習状況調査の結果について御説明申し上げます。

資料をごらん願います。

網走市の子どもたちの全国学力・学習状況調査における平均正答率ですが、調査が開始されました平成19年には全国との差が10ポイント以上下回る教科もありましたが、その差は年々縮まり、年度によりましては、網走市の子どもたちの平均正答率が全国の平均正答率を上回る教科も見られるようになってきました。

しかし、漢字を書くことや四則計算など、依然として課題があります。

今後さらに子どもたちに必要な力を見きわめ、確かな学力をつけることができるよう、網走市教育委員会を初め、網走市内小中学校で取り組んでいく必要があります。

これらのことを踏まえまして、これまでの学力向上の取り組みを広く地域、保護者に理解してもらい、学力の課題について共有をし、学校、地域、保護者が一丸となって学力向上に取り組むため、市内小中学校全体の調査結果について、今後の方策とともに公表することといたしました。

初めに、1 ページの下段は本調査の概要になります。

調査の目的、実施日、調査対象学年と対象学年の児童生徒数、調査の内容を記載しております。

調査は市内小学校 9 校の 6 年生302名、中学校 6 校の 3 年生291名を対象に、平成26年 4 月22日に行われました。

調査の内容ですが、国語と算数・数学の 2 教科で、知識に関する A 問題と、活用に関する B 問題の

教科に関する調査、そのほか生活習慣や学習環境等に関する児童生徒に対する質問紙調査、学校に対する質問紙調査が行われております。

2 ページから 3 ページ、4 ページは結果の概要です。

初めに、2 ページ上段の各教科の平均正答率と平均正答数についてです。

平均正答率ですが、小学校では国語の A で 72.7 ポイントと、全国と比較しマイナス 0.2 ポイントという結果であり、ほぼ全国の平均正答率と同じでした。

しかし、そのほかの 3 領域については、全国に比べ 3 から 5 ポイントの範囲にあり、全国に比べやや低い状況にあります。

しかし、下段にあります平均正答数で比較をしますと、その差は 1 間にも満たない差となっております。

次に、右側の中学校ですが、小学校同様、国語 A において全国比マイナス 1 ポイントとほぼ同様に位置しておりますが、ほかの 3 領域については 4 ポイントから 6 ポイントの差が見られ、やや低い状況から低い状況に位置しております。

小学校に比べ中学校のほうが、若干ですが全国と差がある状況となっております。

次に、中段の（2）全国平均正答率との比較をごらんください。

市内小中学校の平均正答率の分布状況を網かけの水色の部分で示しております。

左側の小学校では、全国平均を 7 ポイント以上上回る相当高いに位置する学校がある一方、また、7 ポイント以上下回る相当低いに位置する学校もある状況で、学校間のばらつきがうかがえます。

中学校は右側に記載のとおりです。

次に、下段（3）の領域別の状況をごらんください。

全国平均を 100 としたときの北海道、網走市の状況をレーダーチャート図にてあらわしております。

小学校では知識に関する国語 A の一部の領域で全国を上回るものもありましたが、主に活用に関する国語 B の書くことの領域において、全国を大きく下回る結果となりました。

これは右側の中学校のレーダーチャート図でも同様に全国を大きく下回る結果となっております。

また、中学校においては、活用に関する数学 B の資料の活用を含め、数学 A 全体も全国を下回ってい

る状況にあります。

これらの状況を踏まえますと、網走市におきましては、国語に比べ算数・数学に課題があるということが言えます。

次に、3 ページの児童生徒質問紙調査の状況についてですが、先ほどと同じレーダーチャート図であらわしております。

上段の生活習慣ですが、朝食を毎日食べるという児童生徒の割合はほぼ全国と同様であり、定着しつつあると思います。

しかし、それぞれの図の左側に位置します 1 日のゲームをする時間、2 時間未満と 1 時間未満ですが、こちらは全国を大きく下回っております。

こちらの表では、実は中身はよくわかりませんが、別の資料で確認をしますと、3 時間以上ゲームをしているという児童生徒の割合が実は多いということがわかります。

これは後ほど、また別な資料でも再度御説明いたします。

次に、中段の学習習慣ですが、学校の授業時間以外にふだん 1 時間以上勉強をするという児童生徒の割合ですが、小学校、中学校とも全国を下回る結果でした。

年々ふえていつているのですが、まだ全国の子どもたちに比べ家庭学習の時間が少ないという傾向にあります。

同じく中段の表で、学習の内容を見ますと、学校の授業の復習をしているという児童生徒の割合は、小学校、中学校とも網走市は全国を大きく上回っております。

一方、学校の授業の予習をしているという児童生徒の割合ですが、小学校では全国を上回っておりますが、中学校では全国の半分以下の数字となっております。

また、家で学校の宿題をしているという割合については、小学校、中学校ともほぼ全国と同じで、学校として宿題を出す取り組みが行われているということが読み取れます。

次に、下段の自尊意識・規範意識ですが、自分にはよいところがあると思うという自尊感情が、小学校、中学校とも全国に比べ 6 割程度と、かなり低い状況にあります。

自尊意識がなぜ低いのか、また自尊感情を高める日ごろの取り組みが不可欠であると考えております。

続きまして、4ページから11ページにおきましては、それぞれの教科の正答率の分布、特に特徴のある設問別の集計結果、設問別集計結果に見る課題、そして、その課題の改善の方策を記載しております。

まず初めに4ページですが、小学校の国語Aになります。

上段の正答率の分布で、4から6問の下位層の子どもたちが全国に比べ少なく、逆に12問から14問正解している子が多い傾向にあります。

国語Aに関しては、基礎的な事項が定着しつつあることがうかがえます。

中段の設問別集計でも、漢字を書く問題、また漢字を読む問題、故事成語の使い方などでは全国を上回る正答率でした。

しかし、1の二の(2)勝利をいろうという漢字が全国比マイナス7.3ポイントということで、漢字についてはこれからも実生活において使うなど、さらなる取り組みが必要であると考えております。

5ページ小学校国語Bですが、国語Aに比べ正答率が少ない層の割合に位置する児童が多く、正答率が多い層の割合が少ないということがわかります。

中段の設問別集計結果を見ますと、2の二番、また、3の三番のような問題形式が記述式となっている問題において、全国を下回っている結果になりました。

特に、今の問題で着目していただきたいのは、右側のほうにあります無回答率という割合になりますが、3の三番という問題については、回答率が39.1ポイントと、4割近くの子が無回答であるという状況です。

授業において、書かれていることをしっかり読み取り、自分の考えを整理して、そして書くという表現活動の位置づけが今後重要になってくるということに押さえております。

6ページ算数Aですが、正答数12問以下の分布が非常に多く、逆に16問、17問の正答数の層が全国を大きく下回っております。

中段の設問別集計結果では、1の(3) $9 - 0.8$ のような小数の引き算、また1の(5) $100 - 20 \times 4$ などのような四則混合計算で全国平均を下回っております。

また、6番のコンパスを用いた平行四辺形の書き方についての設問では、全国比マイナス12ポイントという正答率でした。

計算の決まり、また図形の決まりなど、基礎的な部分の未定着が見られます。

続いて、7ページ小学校算数Bですが、算数A同様、正答数が少ない層の分布が多く、正答数が多い層の分布が少ない曲線となっております。

設問別集計結果を見ますと、国語B同様、問題形式が記述式となっている問題の正答率が低く、同じく無回答率も高くなっております。

算数Bにおいては、基礎、基本の定着はもちろんですが、いかに日常の事象と算数を関連づけて考える、そしてこれまで習ってきた既習事項を活用して解決するための見通しを立てていくということが重要になると考えております。

続いて8ページ、中学校国語Aですが、正答数が15問以下の層が少なく、反対に21問から26問の層の分布が多くなっております。

しかし、28問以上の高い層の割合が全国に比べ少なくなっております。

中位の層の子どもたちをより上位の層に引き上げていくかということが、改善のポイントになると考えております。

そのためには日々の授業の中で、小学校同様、漢字を書く学習、また、語句や語彙指導、辞書の活用など、基礎的な部分の定着を図ることが重要であると考えます。

続いて、9ページ、中学校の国語のBですが、正答数が5問以下の層の分布が多く、6問以上の層の分布が少なくなっております。

設問別集計結果では、小学校の国語Bと同様、記述式の問題での正答率が低いこと、また、無回答率も高いということから、小学校と同様、言葉を根拠にして自分の考えを持ち、そしてそれを文章であらわしていくという活動を多く取り入れていくことが改善の方策になると考えております。

続いて、10ページの数学のAですが、小学校、中学校をあわせた全ての教科、領域の中で、最も全国との差が大きかった教科、領域になります。

正答数が26問以下の層が多く、27問以上の層の割合が非常に少なくなっています。

中段の設問別集計結果を見ますと、全国と比較しマイナス10ポイント以上という問題も大変多く、中学校において基礎、基本の未定着が大きな要因であると考えております。

続いて、11ページの数学Bですが、小学校A同様の正答率の分布曲線をあらわしております。

中学校や高校において、数学の授業で掛け算ができない、割り算ができないという実態から、それぞれの学校で学び直しをしているという事実もあります。

数学におきましては、小学校の算数も同様ですが、基礎、基本をいかに定着させるかが課題でありまして、そのためには、少人数指導、また習熟度別学習、補充学習など、よりきめ細やかな指導が必要になってくると考えております。

続いて、12ページから21ページは、児童生徒質問紙の状況になります。

今回は、その中から特徴的なものとして、国語、算数・数学に関する関心・意欲・態度の項目、また、学校の取り組みについて、家庭での学習習慣について、社会に対する興味関心について、家庭での生活習慣について、自尊感情規範意識について、読書についてという8項目について記載しております。

まず初めに、12ページから13ページになりますが、「国語や算数・数学が好きですか」という興味、関心に対し、小学校、中学校とも全国を下回っている状況にあります。

まず、好きになることが大切です。好きになるための授業づくりという部分が、今後改善の方策として必要であると考えます。

続いて、15ページをごらんください。

先ほどのレーダーチャートでも説明をしましたが、上段の「学校の授業時間以外に、普段、1日当たりどれくらいの時間、勉強しますか。」という児童生徒の割合ですが、左から、3つの凡例を含めた1時間以上勉強をしているという児童生徒の割合は、全国から5ポイントから13ポイント下回っている状況にあります。

また、小学校、中学校を比較すると、中学校3年生のほうが、小学校6年生よりもその割合が少ないということは大きな課題であります。

部活動などで家での生活時間が短いということも考えられますが、テレビの視聴時間ですとか、ゲームの時間というのもひとつ要因ではないかと考えております。

続いて、資料は飛びますが、18ページになります。

18ページの下段、「普段、1日当たりどれくらいの時間、テレビゲームをしますか。」という質問があります。

これに対し、左から4つ目までの凡例を含めました1日当たり1時間以上ゲームをするという割合ですが、小学校で全国に比べ10ポイント、中学校でも6ポイント近く上回っております。

1日にテレビゲームをする時間の割合が多いということがうかがえます。

また、資料は21ページになりますが、読書の項目になります。

上段の「読書が好きですか」という割合も、小学校、中学校とも全国を下回り、また、下段の「普段、1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか」という割合についても、30分以上読書をするという児童生徒の割合は、全国を7ポイント、また、中学校で4ポイント下回っております。

朝読書など各学校で取り組みも行われておりますが、さらに読書を進める取り組み、また、家で読書をする家読の推進というのが課題になってくると考えております。

続きまして、22ページから23ページ、24ページは、質問紙調査と各教科の平均正答率の相関について示したグラフになります。

特に相関が見られると思われた項目を8点取り上げました。

学校で取り組んでもらうことで改善されると思われるものを22ページに3項目、家庭で取り組んでもらうということで改善が図られるものについては23ページから24ページにかけて5点記載しております。

幾つか特徴的なものを取り上げますと、22ページ（3）「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集めて整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。」という質問に対して「当てはまる」と回答した子どもたちのほうが正答率が高いということがうかがえました。

また、23ページの（6）の「30分以上読書をする」児童、生徒の割合、また、24ページ（7）の「1日当たりテレビゲームを1時間以上する」という子どもたちの平均正答率と、その時間に相関が見られております。

最後に、25ページから28ページにかけましては、調査で見られました課題を左の黄色の矢印の四角の中で、また、その改善のポイントを右側の水色の四角で表示しております。

25ページについては、これから学校で取り組みを期待するポイントということになります。

続いては、26ページは家庭に協力をお願いし取り組んでいただくという5つの項目を水色の四角で示しております。

また、調査を開始しました平成19年と比較し、網走市でもかなりの改善が見られておりますので、下段のピンクの枠の中に改善されている傾向について7項目記載し、この部分についても引き続きお願いをしてみたいと考えております。

続きまして、27ページから28ページは網走市教育委員会における学力向上の方策について、大きく7点記載しております。

これまで取り組んできたもの、また、これから取り組むもの、そして重点として取り組んでいくものを記載しております。

まず、1点目の教職員の高い指導力を備えるための研修・研究の充実ですが、その方策として、北海道立教育研究所、研修センター等の受講促進や、先進地の視察研修、また、公開研究会への参加、市内全ての学校で公開研究会を実施することなど、支援をしてみたいと思っております。

2点目については、子どもの学びを支える教育環境の整備になりますが、学ぶ意欲を高めるタブレット型端末、また、子どもたちがよりわかりやすく学べる実物投影機、また、ICT機器の活用、また、学校図書館司書の複数配置、学校図書整備などにより、図書館機能の充実を図ってみたいと考えております。

3点目は、子どもたちにみずから学ぶ意欲をはぐくむ確かな学力の定着ですが、長期休業中や放課後の補足的な学習の充実、また、少人数指導や習熟度別学習、標準学力検査やQ-U検査による児童理解の推進、また、学力向上推進委員会活動の支援、家庭での学習習慣確立のための生活リズムチェックシートの積極的な活用を図ってみたいと考えております。

4点目は、学力の基礎となる体力向上になりますが、早寝・早起き・朝御飯など、望ましい生活習慣の定着、タグラグビー教室やタグラグビー大会、また、網走マラソン大会などへの参加促進を図り、体力向上を図ってみたいと考えております。

5点目は、特別支援教育の充実ですが、特別支援教育支援員などの人的支援の充実、また、関連機関との連携、研修会の実施、教育相談体制の充実を図ってみたいと考えております。

6点目は、思いやりを大切に、豊かな心や地域

を愛する心を育みますという点ですが、道徳教育公開研究会実施校への助成、また、教育講演会などの開催、そして地域を素材とした総合的な学習の時間の充実、ふるさと教育や食育などの充実、また、読書ノートによる市立図書館の活用、網走市読書感想文コンクールを実施してみたいと考えております。

7点目は、地域保護者との連携を図り、開かれた学校づくりですが、オープンスクールの実施、網走市PTA連合会と連携、学校支援地域本部事業におけるボランティアの活用、また、学校ホームページの作成などにより開かれた学校を目指し、地域、保護者との連携を図ってみたいと考えております。

次に、公表の方法ですが、本日御説明しました資料をホームページにて公表をいたします。また、本資料の概要版を3ページにまとめまして広報あばしりの12月号に掲載してみたいと思います。

以上で説明を終わります。

○平賀貴幸委員長 それでは、ただいまの内容について、質疑があれば質疑に移りたいと思います。

○飯田敏勝委員 今説明というか報告を受けたのですけれども、非常に多岐にわたって説明を受けた中でも、少し調べないとなかなかわからないということがあって、私もさきの議会の一般質問で公表について取り上げたのですけれども、きょうはこれをしてしっかり読んだ中でしかできないので、そういうことは次回に持ち越したいのですけれども。

何点かちょっとお聞きしたいのですけれども、これの公表につきましては、さきの一般質問のときには、正答率と正答数、市内のどここの学校ではなしに、全体の数字ということで公表して、教育環境の整備に努めたいというのが答弁の大枠だったと思います。

全道的に見ますと、179市町村のうちで84市町村は結果公表に同意したと。これが全道的に、今、伊井学校教育部次長が説明したレーダーチャートとして公表されるということで、網走もその84市町村の中で同意したという新聞記事があります。

結果的に、一つは網走市は学校間の序列化につながるので学校別は公表しないということがあったのですけれども、それはしないということで今後とも堅持していくのかどうかということ。

それから同意しているところは全道的にやはり半数にも満たないのです。市としては35市中24市が公

表に同意したと。ただ、一番大きい札幌市が今までなかなか同意しなかったのですけれども、9月に入ってグラフであれば数値そのものが出ないので、全道的な発表には数値を載せないで、グラフだから賛成するというような報道がなされています。

これからいくと、半数にも満たなくて、グラフだからということからいうと、札幌を除けばそんなに、全道的に札幌が人口的にも一番多いですから、やはり市町村間別の結果公表には各市町村も神経をとがらせていると思います。

その懸念が、学校の序列化というのですか、市町村の序列化につながるのではないかということはあるのですけれども、それらを含めて、今後学校間の公表はしないということと、市町村間の序列化につながる懸念もあるのではないかという点については、どのように今のところ考えているか、まず一点お聞きしたいと思います。

○三島正昭学校教育部長 学校別の公表につきましては、9月の一般質問でもお答えしていますとおり、学校間の序列化につながる懸念があるということから、網走市としては学校別の公表はしないという考え方でおります。

また、北海道が11月に公表を予定しております全道の市町村別の結果の公表の内容につきましては、平均正答率、平均正答数とも数値ではあらわさない、それぞれの領域別のレーダーチャート、グラフを用いた方向で公表するというのできておりますので、当市につきましては数値も公表いたしますし、レーダーチャートでもそれぞれの項目を公表いたしますので、北海道の公表はその公表する資料の中の一部が北海道として公表されるという認識でおりますので、網走市としては北海道の公表に同意をしたところでございます。

また、全道的に84市町村が現在のところ同意をしているという状況であると聞いておりますけれども、これらの中にも数値の公表まで至っていない市町村もあると聞いておりますので、数値の公表ではないグラフでの公表については同意をしているという市町村もあると伺っておりますので、それぞれ市町村の教育委員会の考え方で同意、不同意がなされているのだらうと思います。

○飯田敏勝委員 きょうは私もよく報告を受けて、見てみなければだめなところなのですけれども、特に一般質問でも言ったとおり、教育環境の整備ということになりますと、今、最後に7点ほど伊井学校

教育部次長のほうから説明を受けました。

特に、この中で少人数学級と習熟度ということで、端的にさっと見た感じでは、小学校の算数ではそれほど差がないのに、中学校へ行くと数学になると差が大きくなるという傾向、これは平成19年度の調査の時からも、それなりに向上はしているのだけれども、特に小学校の算数から中学校の数学へ行くというのは、どうしてもかなり格差が広がるというのは、私たちの時代もそうだったのですけれども、私たちの時代よりかなり高度になっていると。

方程式にしても、微分、積分にしても高度になっているので、だんだん格差がついていって取り残されていくというようなことが私の時代もあったのですけをども、もっと顕著に出ているかというような感じは受けたのです。

そういうことからいうと、やはり少人数学級、特に教育環境の整備の中でも少人数学級ということ、これは学校側だけなののですけれども、ここでは家庭環境も重要だということを言っているのですけれども、そういうような方策について、今後教育委員会として少人数学級の方向というのはどのように考えているのか、今回の教育委員会議が何かでもいろいろ出たと思うのですけれども、その辺も含めて方向性はをお持ちだと思うのですけれども、いかがですか。

○三島正昭学校教育部長 今回のこの結果にもあらわれておりますし、また、これ以前から学校の現場からもさまざま聞いているところがございますけれども、やはりクラスの中にも、算数でいえば掛け算、割り算が定着していない子どももいるのですとか、国語であれば漢字が十分に定着をしていないお子さんがいるのですとか、そういった状況がクラスの中でも起こっているという状況については、学校現場からも聞いていたところがございます。そういった中で、現在も北海道の事業を活用するなど習熟度別に分けた学習ですとか、そういった方向をとりながら、基礎、基本の定着を現在も取り組んできているところがございますけれども、やはりそれが一定の効果があらわれてきているという結果もありますことから、今後についてもそういった取り組みについて、教育委員会としても取り組んでいきたいと考えております。

○飯田敏勝委員 主なところはわかりました。

ただ、今の少人数学級が、いわゆる小学校1年生の35人学級、現在1年生で35人学級ということで、

その他市町村別に、市町村が予算をつければ2年、3年という形でやっているところもあります。

2011年に義務教育標準法が改正されまして、31年ぶりに学級編制基準が改正されて小学1年生からの35人学級が実現したのですけれども、先日これに逆行するような、国の財務省が40人学級に戻すというようなことで文科省に打診して、復活方針を出したのですけれども、それは文科省は段階的に小中学校の全学年で35人学級にしていく計画は出していると思うのです。

そういうことからいうと、非常に逆行するような方針が出たのですけれども、恐らく教育委員会議でもそういうような話題になったと思うのですけれども、そういう方向というものは、今のこの学力テストをやりながらそういう方向を出すというのは、本当に逆行するのではないかと思うのですけれども、その辺の見解は教育長はいかがですか。

○木目澤一三教育長 ただいま35人学級、あるいはこれまでの40人学級についてのお話してございましたけれども、まだ確かな結論は出ておりませんが、このことにつきましては、先ほど学校教育部次長から説明いたしましたとおり、少人数指導でありますとか、習熟度別の指導によつての効果ということもある程度見えている部分もありますので、これにつきましては、一つは北海道都市教育長協議会、それから11月の上旬には全国都市教育長がございますので、その中でも出てくるというふうに考えております。

私も出席しますので、今言ったような意見については、北海道全体としても、また国全体としても、方向性を誤らないような意見はその中でもぜひ述べてきたいと考えております。

○飯田敏勝委員 教育環境の整備ということでは、いろいろ学力テストの賛否はあるのですけれども、そういう方向では一致していますので、この報告書を今後見せていただきながら、教育環境の整備ということで、私はしっかり委員会で議論してまいりたいと思います。

私からは以上です。

○平賀貴幸委員長 ほかいかがですか。

○近藤憲治委員 まずは報告を聞かせていただきました。

私も9月の一般質問で、これに関連する質疑をさせていただきました。

その際にも少しお話しをさせていただきましたけ

れども、なかなか厳しい現実が突きつけられたのだというふうに思います。

ただ一方で、今までなかなかわかっていなかった網走の子どもたちが基礎学力の面でどの位置にいるのかというのは、少なくともわかってきたということもありますので、今度はここからどうするかという話になっていくのだと思います。

いろいろな課題と、それに対する対策をお示しをいただきました。

それはそれで一つずつ個別に進めていく必要があるのだと思うのですけれども、やはり一方で学校現場だけでどうにかするでありますとか、教育委員会でどうにかするだけではなくて、地域全体で今置かれているこの厳しい現実をどう捉えて、そして、まちを挙げてどういうふうに対応していくのかという機運を高めていくことが極めて、重要であると思います。

そういった点では、後段フォーラムの開催等も含めて方向感が示されていますが、もう少し具体的に、公表から地域全体で子どもたちの基礎学力の現状について危機感を共有するような流れをどうつくっていくのかというお考えがあれば、お示しいたきたいと思います。

○三島正昭学校教育部長 この報告書の冒頭でも触れさせていただきましたけれども、やはり学校、教育委員会だけではなかなか取り組みが進まないといえますか、限界があるということもございまして、保護者、また地域の方々もそういった状況を認識していただいて、ともに取り組んでいただくということがこれからは強く必要になってくるだろうと考えております。

個々具体的にこの方策を今後どのように具体的な施策で展開をしていくかということにつきましては、今後さらに学校現場等とも検討していきたいと考えておりますが、学力向上推進委員会で12月13日に現在予定をしております学力向上フォーラムの開催がございまして。

ここでは学校関係者、教育委員会関係者、そしてPTA、地域の方々の参加もいただきながら、ともに子どもの能力を伸ばすためにどうしていくのかといったようなパネルディスカッションですとか、親として何ができるのかといったような内容での講演ですとか、そういったことも広くPRをしながら参加していただいて、ともに考えていきたいというような考えでおります。

網走市PTA連合会とも連携しながら、保護者の方々とともに考えていくような企画も、今後検討していきたいと考えております。

○近藤憲治委員 基礎学力の問題は一朝一夕にどうにかなるという話ではないというふうに思っています。

やはり5年、10年スパンで粘り強い取り組みをしてこそ、子どもたちの基礎学力を向上していく、あるいは保障していくという取り組みができるというふうに思っていますので、今回公表して、その後さまざまな取り組みをということですが、継続的に進めていただきたいと思います。

また一方で、これは見解をお持ちであれば御説明いただきたいと思いますので、基礎学力の部分で、この学力テストの今置かれている厳しい現状から、少なくともどここの段階まで子どもたちの学力を身につけさせていくべきなのかという部分で、今回全国平均と比べても下回っている教科が大半であるということからすれば、まずは全国平均水準を目指していくのが一定のめどなのかと、私個人としては思うのですが、ただ、それで終わりではない話だとも思いますので、そういった基礎学力を保障する、あるいは高めていくということであれば、どのあたりを目標値に定めて地域一丸となって取り組んでいこうと考えていくのか、どういった方向感をお持ちなのかというのがもしあれば、お示しいただきたいと思います。

○木目澤一三教育長 ただいまの御質問にお答えしたいと思います。一つは基礎、基本の保障というようなこと、これは公の学校に課された大きな責務だと思っております。

今学力調査にかかわりましては、毎年度各学校で学校改善プログラムというのを作成しております。きょう公表させていただきましたように、どのようなところに課題があるのか、その課題を克服するために、改善するために、どのような策があるのかというようなことを各学校では考えていただいております。

それを各学校の改善プログラムというのを突き合わせをしながら、市教委としてもどのようにそれを施策につないでいくかというような方向も含めて検討しているところでありますけれども、学校改善プログラムの中においては、今御質問のありました、一つ例にとりますと漢字の理解ということ、それをどの程度定着させるかということにつきましては、

目標値として上げていただきたいということを各学校にはお願いをしております。その目標値といいますのは、各学校によっては8割程度を最低の目標とする、あるいは85%というようなことで目標値を定めていただいているのが現状でありますので、それを先ほど言いましたように継続してやっていくことに意義があると思いますし、また、継続といいますが、6年たちますと小学校は卒業していくわけですので、そういったことを勘案しながら、その年度に子どもたちには学習指導要領で押さえられている指導内容、指導事項についてはしっかり定着できるような工夫も含めて、今後とも各学校あるいは関係機関とも連携しながら進めてまいりたいと考えております。

○平賀貴幸委員長 ほか。

○井戸達也副委員長 では、私のほうから一点だけ。

私もさまざま学校のほう、校長先生、教頭先生からいろいろお話を伺って、学力向上の取り組みについては各学校で非常に熱心に取り組まれていると思っています。

学校側は子どもたちの学力を上げて引っ張り上げる側、保護者は家庭において子どもたちを後ろから押して上げていく存在と考えたときに、やはりお互い認識をともにして連携した中で取り組んでいかなければ、なかなかうまく成果が得られないのかと思いますので、こちらのほうでPTA連合会と連携していくという形も書かれておりましたけれども、個々の学校の単位PTAの各部会がありますので、そういったところまで浸透させて、巻き込み方を上手に、保護者を巻き込んだ中で課題を共有して取り組んでいただきたいと思います。

以上です。

○平賀貴幸委員長 ほか、よろしいですか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

それでは、この学習状況調査の結果については、報告を受けたということとしたいと思っております。

○平賀貴幸委員長 そのほかですが、各委員の皆さんから何かございますか。

〔「なし」と呼ぶ者あり〕

理事者のほうからは。

〔「ありません」と呼ぶ者あり〕

それでは、本日はこれにて総務文教委員会を終了いたします。

お疲れさまでした。

午後 1 時49分閉会
